

公益社団法人日本薬剤学会 2019年度事業計画

(2019年4月1日から2020年3月31日まで)

はじめに

1985年に任意団体として設立された本学会は、2015年に創立30周年の節目の年を迎えた。この間、2006年に文部科学大臣より社団法人としての設立認可を、2012年には内閣総理大臣より公益社団法人としての移行認定を受け、科学の発展とともに社会貢献を目指した活動を行うことが求められている。本学会の事業は定款に定める以下の各事業を総称して「薬剤学及び関連諸領域に関する情報提供及び啓発、研究の振興、調査研究並びに評価により、薬剤学の進歩とその成果の利用普及を図る事業」として認定を受けており、理事会は別紙に詳述するこれらの事業を、公益法人としてのガバナンス体制の下に実施する。

- (1) 学術集会、研修会、講習会等の開催
- (2) 機関誌、学術雑誌、その他出版物の刊行
- (3) 研究の奨励及び研究業績の表彰
- (4) 国内外の関連学協会等との連絡及び協力
- (5) 研究及び調査
- (6) 薬剤学に関する学識及び技術等の認定
- (7) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

基本方針

- 1 公益社団法人へ移行後丸6年を経過し、今年度は特に財務面、ガバナンス面での確固たる体制の整備に注力するとともに、新たに発足した代議員制の定着を図る。
- 2 日本の薬剤学に関するサイエンスレベルの向上を図るとともに、新規医薬品の開発及び医療現場における医薬品の適正使用への取り組みを推進する。
- 3 医学・工学をはじめとする関連諸領域との連携をより緊密なものとし、学際的な研究協力を推進することによって、製剤・DDS等における新しい技術開発に積極的に参画する。
- 4 産官学一体となった活動を通じ、医薬品の有効性と安全性を担保するための規制上の問題に関して公益的な立場から提言を行う。
- 5 薬剤師の職能の向上を目指して、国際標準的な医薬分業を推進する。
- 6 学会活動の国際化を目指して、FIP (International Pharmaceutical Federation, 国際薬学連合) などの国際学会および他国の薬剤学関連の学会との協力体制を構築する。
- 7 薬剤学の知識・技術を基盤として、機能性食品や化粧品などの開発、適正使用への取り組みを支援する。
- 8 2010年度より発足した製剤技師認定制度の社会的認知度を向上させるとともに、各企業への製剤技術の普及・伝承に注力する。
- 9 共通の研究目的等による分野横断的なユニットであるフォーカスグループによる活動を強化する。

公益目的事業 1「薬剤学及び関連諸領域に関する情報提供及び啓発、研究の振興、調査研究並びに評価により、薬剤学の進歩とその成果の利用普及を図る事業」

会長

1 APSTJ 2025 推進事業

- 理事会主導により、日本薬剤学会のこれからのあり方“APSTJ 2025”の検討を行う。
- 日本学術会議が大型研究のために策定しているマスタープランの推進についての検討を行う。
- 国内外の関連学協会との交流事業を推進する。

2 国際標準医薬分業推進事業

- 国際標準的な医薬分業（完全分業あるいは強制分業）への移行について、必要な情報を整理しつつ、実施に向けての戦略を立案し、関連団体と連携しながら行政への働きかけを推進する。

副会長総務担当理事

1 学会賞等表彰事業

- 学会賞選考委員会
- タケル&アヤ・ヒグチ記念各賞選考委員会
- 永井記念国際女性科学者賞選考委員会
- 理事会の推薦、決議

1.1 薬師メダル

薬剤学分野の科学・技術と薬剤師職能を統合化したシステム薬剤学に関して、卓抜した業績を有する者を理事会の推薦により表彰する。

1.2 学会賞

薬剤学、製剤学、製剤技術並びに医療薬剤学の発展に関し卓抜した業績を有する者を表彰する。

1.3 功績賞

本学会の運営・発展への貢献、薬剤学教育への貢献、薬剤学、製剤学、製剤技術並びに医療薬剤学の振興への貢献を行った者を表彰する。

1.4 奨励賞

薬剤学、製剤学、製剤技術並びに医療薬剤学の基礎及び応用に関し、独創的な研究業績を挙げつつあり、これらの分野の将来を担うことが期待される若手研究者を表彰する。

1.5 タケル&アヤ・ヒグチ記念荣誉講演賞（西暦偶数年度に実施）

故タケル・ヒグチ教授の薬剤学・製剤学分野における学問上、教育上、医療上並びに医薬品工業上の発展に対する偉大な功績、更に故アヤ夫人の功を記念し、同記念荣誉講演の講師を表彰する。

1.6 タケル&アヤ・ヒグチ記念賞（西暦奇数年度に実施）

薬剤学・製剤学分野における学問上、教育上、医療上、医薬品工業上の発展に顕著な功績を挙げ、受賞を励みにして更なる活躍が期待される者を表彰する。

1.7 永井記念国際女性科学者賞

薬剤学領域において顕著な業績を挙げ将来も顕著な業績を上げることが期待される、国内外の現職の女性科学者を表彰する。

1.8 創剤特別賞

国際的に特に顕著な評価を受けた有形・無形の創剤を創成した者を臨時に表彰する。

1.9 優秀論文賞（西暦奇数年度に実施）

機関誌「薬剤学」及び公式欧文誌"Journal of Drug Delivery Science & Technology"に掲載された優秀な論文の著者を表彰する。

1.10 製剤の達人称号

医薬品製剤技術の研究開発に長年にわたり従事し、高い技術を確立した者を表彰する。

1.11 国際フェロー称号

薬剤学関連領域で国際的に特に顕著な業績を上げた会員、本学会の国際賞を受賞した外国人研究者等を表彰する。

1.12 「薬と健康の週間」懸賞論文

「薬と健康の週間」への協賛として、薬学を学んでいる若い学生を対象に与えられたテーマについての論文を広く募集し、優秀な論文の著者を表彰する。

2 創剤開発・研究賞表彰事業

- 旭化成各賞選考委員会

2.1 旭化成創剤開発技術賞

国際的な製剤の品質に関する考え方の変貌に応える製剤・創剤開発の基礎及び応用に関するハード及びソフトの優れた研究を対象として表彰する。

2.2 旭化成創剤研究奨励賞

製剤の機能化、最適な投与方法とそれに合った剤形開発、製剤の処方研究によって目標とする新規製剤の開発に顕著に貢献した者を対象として表彰する。

渉外担当理事

1 学生主催シンポジウム事業

- SNPEE2019 実行委員会

薬剤学に関わる学生の研究室・大学間を超えた活発な交流と、口演能力や講演会運営スキルを涵養することを趣旨として、年会において学生主催シンポジウム「SNPEE2019*」（「Collaboration～薬剤学で未来を切り拓く～」）を開催する。公募制にて学生演者を募集し、3名の学生演者には、自身の研究を広い視点に立って今一度顧み、その魅力を聴衆に十分に伝えるチャンスとして、この場を提供する。また特別講演の先生をお招きし、本シンポジウムの講評と将来の薬剤学を担う若手研究者に向けてのメッセージをいただく。

*SNPEE: Student Network for Pharmaceutical Education and Evolution

2 広報委員会事業

学会ウェブサイトの企画運営等を通して本学会の活動の広報を行うとともに、会員の拡大のために関連諸領域の研究者への本学会のアピールを図る。また、毎月ニュースメールを配信し、イベント情報や最新情報を会員に届ける。編集委員会と協力しながら、オンライン化された「薬剤学」誌のウェブサイトからの情報発信を行う。

3 医薬品の包装と情報分科会事業

薬剤学を支える包装・情報に関し、専門の研究者・技術者が協議し、本学会会員に情報発信を行うことを目的に、34年会において「医薬品包装シンポジウム」（「医薬品包装機械の変遷と今後の展望」）を開催する。

4 教育分科会事業

薬剤学に関わる教育問題について、専門委員が協議して提言を行うほか、教育資料の企画、年会における「薬学教育シンポジウム」（「今一度、4年制・6年制を考える」）を企画実行する。

国際連携担当理事

1 英語セミナー事業

国際共通言語である英語での討議能力を養うため、訪日した海外研究者・国内の研究者または英語教育専門家等を講師として招聘し、講義・ディスカッションの全てを英語で行う Global Education Seminar を日本の各地区で企画する。

2 国際学会等協力事業

- FIP（国際薬学連合）

FIPの Predominantly Scientific Member Organization として、Council Meeting で重要事項を審議する他、Section/SIG にメンバーを多数派遣する等、BPS の諸活動に積極的に参画する。また、FIP Education に Delegate を派遣する。

- AFPS（アジア薬科学連合）

AFPSの Member Organization として、Executive Committee に役員を派遣する等、アジア地域における薬科学研究の発展に寄与する。2019年度は（Bali, Indonesia）において AFPS Conference が開催される。

- 日韓合同薬剤学若手研究会

日韓合同薬剤学若手研究会に講演者を派遣する。

3 カンサス大学表敬訪問

タケル&アヤヒグチ記念荣誉講演賞の講演者及び会長をカンサス大学へ派遣する。

機関誌担当理事

1 「薬剤学」編集委員会事業

「薬剤学」誌の企画編集と「薬と健康の週間」懸賞論文の選考を行う。2017年度に行った会員アンケートに基づき、引き続き「薬剤学」の記事の充実およびオンライン使用性の改善を図る。

2 投稿論文審査委員会事業

「薬剤学」誌への投稿論文の審査と、優秀論文賞の選考を行う。

3 学会誌出版事業

3.1 機関誌「薬剤学」

「薬剤学」編集委員会の担当する依頼原稿と投稿論文審査委員会の審査による一般論文で構成される「薬剤学」誌を以下のとおり発行する。なお、「薬剤学」誌は1号のみ冊子体で発行し、2～6号はweb配信（J-STAGEでの閲覧）のみとする。

Vol. 79 No. 3 2019年5月1日発行

Vol. 79 No. 4 2019年7月1日発行

Vol. 79 No. 5 2019年9月1日発行

Vol. 79 No. 6 2019年11月1日発行

Vol. 80 No. 1 2020年1月1日発行

Vol. 80 No. 2 2020年3月1日発行

英文論文の受け付けも可能であり、積極的に英文投稿の促進を図る。

3.2 公式欧文誌「Journal of Drug Delivery Science and Technology」

Vol. 50 (2019年4月)～Vol. 55(2020年2月)の計6巻を隔月オンライン発行する。

技術・書籍担当理事

1 製剤技術伝承講習会事業

- 製剤技術伝承委員会

製薬企業各社でのアウトソーシングの加速により、滅失が懸念されているわが国の製剤技術を次代の製剤研究者・技術者に継承するため、座学・実習の講習会を企画運営する。更に製剤の達人称号の選考も行う。今期の開催予定は次のとおり。

1.1 第25回シミック製剤技術アカデミー／製剤技術伝承講習会

「経口製剤の製剤設計と製造法」

2019年6月5、6日、7月2、3日名城大学ナゴヤドーム前キャンパス

1.2 第17回製剤技術伝承実習講習会

「製剤設計の基礎となる多様性広がる化合物の評価」（仮題）

2019年8月29、30日

星薬科大学

1.3 第18回製剤技術伝承実習講習会

「連続生産」

2019年9月12、13日

(株)パウレック

1.4 第26回シミック製剤技術アカデミー／製剤技術伝承講習会

「非経口製剤の製剤設計と製造法」

2020年1-2月を予定

会場未定

2 製剤技師認定事業

- 製剤技師認定委員会

医薬品メーカー等において製剤に携わる研究・開発・製造担当で、日常業務の遂行上必要とされる共通の基礎的かつ専門的事項及び法規・制度の学識を修得している者を「製剤技師」として認定する。過去89回で約190名の認定者が誕生しているが、まだまだ大手製薬会社からの受験が少ないため、引き続き方を模索していく。また、被認定者の学会への入会を推進するとともに、これら認定製剤技師の企業内での職能・役割アップについて相互研鑽を図れる機会の提供を検討していく。また、製剤技師認定試験が10年目を迎えるため、「製剤技師認定試験の問題と解説（第6回-10回）および傾向と対策を出版する。

2.1 第10回製剤技師認定試験

2019年10月19日

慶應義塾大学芝共立キャンパス／神戸薬科大学（予定）

2.2 「製剤技師認定試験の問題と解説（第6回-10回）および傾向と対策を出版する。

3 出版委員会事業

- 出版委員会

本学会の事業に関連する書籍の企画編集を行う。

3.1 昨年度に引き続き、薬剤学会フォーカスグループ（FG）の活動に伴う各グループの代表的テーマを総論的にまとめたシリーズ書籍の企画出版を計画する。

3.2 海外で出版されている書籍の翻訳を検討する。

製剤・創剤セミナー担当理事

1 製剤・創剤セミナー事業

- 製剤・創剤セミナー実行委員会

大学・製薬企業・医療機関などにおいて製剤技術に関わる研究者・学生が一堂に集い、医療・薬

剤学に関し、サイエンスとテクノロジーの観点のみならず刻々と変化する時代のニーズも合わせて議論する合宿形式の討論会「製剤・創剤セミナー」の企画運営を行う。

前回から新しく始めた学生企画プログラムをさらに内容の濃い企画へと発展させ、本セミナー事業の一つの柱として育てていく。

1.1 第44回製剤・創剤セミナー

『医療ニーズの変貌に挑戦する製剤・創剤』

2019年8月23-24日

湘南国際村センター（神奈川県三浦郡葉山町）

公開市民講演会事業担当理事

1 公開市民講演会事業

一般市民を対象とした公開市民講演会を企画・開催する。

今期の開催予定は次のとおり。

2019年10月5日(土) 15時～17時(予定) 場所：仙台市中小企業活性化センター(予定)

FG担当理事

1 FG統括委員会事業

共通の研究目的等による分野横断的なユニットである各フォーカスグループ(FG)を統括する委員会として、事業・予算の管理を行い、各FGに対する助言やFG・理事会間のリエゾンを担当する。

FG統括委員会では各FGの活動状況を確認し、継続・廃止などの審議を行う。

- 【経口吸収FG】

経口吸収に関わる生体膜機能、吸収機構、体内動態、モデリング&シミュレーション、製剤設計や臨床開発に至るまでの幅広い問題を統合し、新たな経口吸収研究を開拓する。今期は、年會にてラウンドテーブルを開催すると共に、他学会でのシンポジウムを企画する。また例年通りに合宿討論会を予定する。

- 【経皮投与製剤FG】

化粧品、医薬品、生活化成品、素材メーカー、大学研究者など様々な分野の研究者を集め、経皮投与製剤の理論と実際の情報共有を行うとともに、経皮投与製剤研究のさらなる活性化を図る。年會中のラウンドテーブルの提案と独自の経皮FGシンポジウムを11月に都内で開催予定。

- 【経肺経鼻投与製剤FG】

吸入剤・経鼻投与剤の特性評価、開発の基礎研究、製薬会社における開発の実例、投与デバイス開発の動向、薬物動態、治療に関する臨床現場での問題点について情報交換を行う。薬剤学会年會において共催シンポジウム(学術シンポジウム2)を行う。研究会開催を検討する。

- 【核酸・遺伝子医薬FG】

近年、遺伝性希少疾患に対して核酸医薬品が相次いで承認されており、新たな創薬モダリティとしての期待が高まっている。一方で、現在承認されている中枢疾患や眼疾患に対する核酸医薬品治療は、髄腔内投与や硝子体投与などの侵襲性が高い投与方法に限定されている。また、がんに対する有効な核酸医薬品は未だ実用化に至っていない。これらの背景に基づき、核酸医薬DDSの新たな技術領域を開拓すべく経鼻投与や点眼・吸入といった非侵襲的技術と、免疫チェックポイント阻害療法との併用が期待されるがん免疫にフォーカスを当て、これらの次世代の核酸医薬DDS技術の有用性について議論するためのラウンドテーブルシンポジウムを企画する。また、その他の学会等において核酸医薬を含めたシンポジウムを企画する。

- 【薬物相互作用・個別化医療FG】

「薬物相互作用FG」から「薬物相互作用・個別化医療FG」と改称し、創薬研究者(基礎・臨床開発)・臨床薬剤師・審査サイドなど種々の立場から広く意見を求め、交流する場を提供する。2019年5月に開催予定の第34年會のラウンドテーブルでは、Special populationをテーマに取り上げ、産と学・基礎と臨床等、様々な視点から議論する機会としたい。さらにFG登録メンバーのみならず、国内の他学会のメンバーとの交流も積極的に行うため、共催シンポジウム(日本医療薬学会年會、医療薬学フォーラム、その他医学関係学会、基礎薬学関係学会等)の開催を継続的に行う。

- 【医療ZDと完全分業FG】

薬剤師が医師処方箋のレビューを含めた真の調剤を実践し、そのリスク管理により医療におけるZero Defectが達成されるよう、医薬分立を基盤としたシステム・教育の構築を目指す。

- **【DDS 製剤臨床応用 FG】**
2019年5月に開催予定の第34年会においてラウンドテーブルを開催し、脳内薬物デリバリーの現状、課題、将来展望について議論する。また、FG登録メンバーを中心に様々な経験や知識を共有化するため、第9回目となる合宿討論会（場所：帝京大学箱根セミナーハウス、日程：10月予定）を開催し、議論を深める。
- **【個別化製剤 FG】**
EuPFIと連携し、小児製剤に関する現状と課題の情報交換を行い、グローバルに小児薬の開発が進展するための基盤を整備する。また、患者が個別に抱える薬剤に対する課題および医療現場における薬剤の使われ方や安定性の問題などを検証し、その重要性を明らかにする。抽出された課題を解決するための技術開発ならびに必要な情報を創出する仕組みを併せて検討する。具体的には、患者や医療者から薬剤に対するニーズを発見できる研修を企画する。さらに、研究会・勉強会の開催を通して、課題共有および解決のための枠組みを提案する。
- **【物性 FG】**
医薬品原薬、製剤原材料ならびに製剤の物性評価技術にフォーカスをあて、技術の発展や創薬/創剤への展開についての議論・提言を行う。今年度は、熱分析に関するセミナーを開催する。さらに、若手研究者の研修・啓発・育成のために、物性に関する伝承実習講習会のサポートを行う。また、「固体医薬品の物性評価 第2版」のQ&A集、及び、固体医薬品物性評価の英語版書籍の製作を検討する。
- **【臨床製剤 FG】**
薬学会第139年会の臨床製剤関係シンポジウムの支援、他のFGとの合同セミナー、FGのメンバーでの集合研修や院内製剤に関する病院薬剤師向けのセミナーの開催を企画する。これらの活動を通して臨床製剤FGの活動を広報するとともに、個別化医療を支援する新規な臨床製剤開発を目指す。また、新しい企画として「調剤行為」と「院内製剤（臨床製剤）の調製」の実態調査を行い、それらの行為に対する認識を明らかにし、国際的な認識との調和を図る。
- **【製剤処方・プロセスの最適化検討 FG】**
2019年度は日本薬剤学会第34年会にてラウンドテーブルセッションを開催する。またこれまでの活動の中で実施したアンケート調査・実習講習会・講演会の内容を基に、QbD実践の普及に必要な科学的・技術的な課題に関するアンサー・ソリューション・アイデアを提供する成果物の出版に向けた最終的なまとめ作業を行う。そのために、FG執行部メンバーによる定期的な委員会を開催し、出版の対象となるQbD実践の課題について徹底した議論を行う。さらに、3年間の活動の締めくくりとして、“FG活動報告会-QbDと医薬品のライフサイクルマネジメント（仮題）-”を2020年2月もしくは3月に開催する。
- **【前臨床開発 FG】**
前臨床開発に関わる諸問題、例えば原薬形態の効率的な決定法、生物薬剤学的評価方法、加速試験が困難な製剤の判断法、安全性試験の製剤設計、FIHからPOCまでの臨床試験用製剤の開発などをテーマとして、タイムラインやリスクマネジメントのビジネス視点を中心とした議論を行う。2019年度は第4回討論会の開催を予定している。近未来の医薬品開発エコシステムにインパクトのあるアウトプットを目指したい。
- **【超分子薬剤学 FG】**
超分子とは、複数の分子が共有結合以外の結合により、秩序だって集合した分子のことをいい、薬剤学領域でもリボソーム、多糖類、アルブミンなど多数存在する。学問としての「超分子化学」はこれまで理工学領域主体であったが、「超分子化学」と「薬剤学」との融合による「超分子薬剤学」を立ち上げ、次世代の薬剤学を創製することを目的に活動していく。2019年度は、第2回超分子薬剤学FGシンポジウムの開催を予定している。

2 製剤設計における種差の問題検討会（略称：製剤種差検討会）事業

製剤種差検討会に入会した会員（団体）が製剤設計における種差の問題に関する経験事例の報告を行い、種差が影響する要因について議論し整理することを目的として、2019年度は年2回（第8回は京都地区、第9回は東京地区交互）を目処に事例報告会を開催する。また、大きな財産となりつつある質問箱（現在140件の質問）&コメント・回答集の充実を図る。更に、団体会員数（2018年11月現在54団体）の増加を図るとともに、本検討会の将来的な展開方法（分科会の設置、公的資金の獲得等）ならびに事例報告会の運営方法（グループ討論の導入等）について世話人会を中心に議論を進める。

制度改革担当理事

1 制度改革担当事業（制度改革委員会）

- 公益社団法人として、持続性のある主体的なあるべき制度に整える。
公益社団法人として主体的で統制された本学会の運営体制を目指し、事務専任人材の補填だけでなく、理事会が学会事務局と業務委託先（学会支援機構、公認会計士）を統括管理できる運営体制を構築する。検証は四半期ごとに実施する。

年会長

1 年会事業

- 年会組織委員会

本学会最大の学術集会「年会」の企画運営を行う。年会では、口頭またはポスターによる研究発表、特別講演、招待講演、各種受賞講演、各種シンポジウム、ランチョンセミナー、企業展示会等の多種多様なプログラムを設けており、定時総会もこの会期中に併催される。また、各 FG から提案されたテーマを含めてラウンドテーブルセッション形式での討論を行う。今期の開催予定は次のとおり。

1.1 第34年会

「薬剤・製剤における温故知新」

2019年5月16日（木）～18日（土） 富山国際会議場・富山市民プラザ

学会運営

1 理事会

学会の業務執行の決定、理事の職務執行の監督等を行う機関であり、全ての理事で組織される。法人のガバナンスを担う中心的な機関である。今期の開催予定は以下のとおり。

第1回理事会	2019年4月頃
第2回理事会	2019年5月頃
第3回理事会	2019年9月頃
第4回理事会	2020年1月頃

2 代議員総会（定時総会）

従来までの評議員が廃止され、2018年度より正会員の選考により新たに代議員が選任された。この代議員による総会は、定時総会として社員総会に位置付けられ、正会員で構成される学会の最高の決議機関である。今期の各開催予定は以下のとおり。

2.1 定時総会 2019年5月16日 富山国際会議場

以上

(参考)事業別収支(損益ベース)一覧

2019年4月1日から2020年3月31日まで

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

事業名	経常収益	経常費用	当期経常増減額	備考
公益目的事業				
APSTJ2025 推進事業	—	50,000	△50,000	
国際標準医薬分業事業	—	100,000	△100,000	
学会賞等表彰事業	570,000	2,080,000	△1,510,000	
創剤開発・研究賞表彰事業	1,500,000	1,166,000	334,000	
広報委員会事業	—	16,000	△16,000	
医薬品の包装と情報分科会事業	—	126,822	△126,822	
教育分科会事業	—	121,000	△121,000	
学生シンポジウム事業	—	97,026	△97,026	
国際学会等協力事業	—	2,358,456	△2,358,456	
英語セミナー事業	90,000	655,463	△565,463	
機関紙出版事業	400,000	5,350,918	△4,950,918	
「薬剤学」編集委員会事業	—	389,320	△389,320	
投稿論文審査委員会事業	—	—	—	
出版委員会事業	—	—	—	
製剤技術伝承委員会事業	10,661,000	7,261,762	3,399,238	
製剤技師認定事業	1,920,000	842,295	1,077,705	
製剤・創剤セミナー事業	7,730,000	7,011,000	719,000	
FG 統括委員会事業	4,961,000	4,830,921	130,079	
公開市民講演会事業	—	330,000	△330,000	
製剤種差検討会事業	580,000	571,000	9,000	
制度改革事業	—	325,000	△325,000	
年会事業	30,161,000	30,225,000	△64,000	
共通	11,630,000	10,926,000	704,000	
小計	70,203,000	74,833,983	△4,630,983	
法人会計	12,012,654	8,974,000	3,038,654	
合計	82,215,654	83,807,983	△1,592,329	

収支予算書(損益計算ベース)
2019年4月1日から2020年3月31日まで

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

科目	公益目的事業会計	法人会計	合計
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	0	100,000	100,000
基本財産受取利息	0	100,000	100,000
特定資産運用益	0	0	0
特定資産受取利息	0	0	0
受取会費	11,630,000	11,630,000	23,260,000
正会員	6,500,000	6,500,000	13,000,000
学生会員	850,000	850,000	1,700,000
賛助会員	4,280,000	4,280,000	8,560,000
事業収益	58,473,000	0	58,473,000
学術集会・委員会等事業収益	54,083,000	0	54,083,000
参加費	28,741,000	0	28,741,000
意見交換会費	5,101,000	0	5,101,000
助成金・補助金	0	0	0
寄付金・協賛金	3,575,000	0	3,575,000
セミナー共催金	4,536,000	0	4,536,000
広告料	972,000	0	972,000
出展料	11,158,000	0	11,158,000
学会誌等出版事業収益	400,000	0	400,000
購読料	150,000	0	150,000
投稿料・別刷料	60,000	0	60,000
許諾料・使用料	140,000	0	140,000
広告料	50,000	0	50,000
学会賞等表彰事業収益	2,070,000	0	2,070,000
助成金・補助金	1,500,000	0	1,500,000
寄付金・協賛金	570,000	0	570,000
指定正味財産からの振替	0	0	0
製剤技師認定事業収益	1,920,000	0	1,920,000
受験料	1,300,000	0	1,300,000
認定料	620,000	0	620,000
雑収益	100,000	282,654	382,654
雑収益	100,000	282,550	382,550
受取利息	0	104	104
経常収益計	70,203,000	12,012,654	82,215,654
(2) 経常費用			
事業費	74,833,983		74,833,983
給料手当	7,800,000		7,800,000
臨時雇入金	4,416,500		4,416,500
法定福利費	468,000		468,000
会場費	18,836,000		18,836,000
旅費交通費	4,620,800		4,620,800
会議費	2,841,816		2,841,816
意見交換会費	5,291,000		5,291,000
賞状・賞牌・副賞費	2,955,500		2,955,500
通信運搬費	1,005,000		1,005,000
ウェブサイト管理費	967,780		967,780
消耗品費	1,784,744		1,784,744
減価償却費	5,000		5,000
印刷製本費	7,432,500		7,432,500
貸借料	1,458,000		1,458,000
保管料	200,000		200,000
諸謝金	5,859,643		5,859,643
租税公課	220,000		220,000
支払負担金	1,665,000		1,665,000
業務委託費	6,456,000		6,456,000
雑費	550,700		550,700
管理費		8,974,000	8,974,000
給料手当		2,200,000	2,200,000
法定福利費		132,000	132,000
旅費交通費		854,000	854,000
会議費		1,500,000	1,500,000
通信運搬費		300,000	300,000
ウェブサイト管理費		66,000	66,000
消耗品費		500,000	500,000
印刷製本費		300,000	300,000
貸借料		352,000	352,000
租税公課		600,000	600,000
業務委託費		770,000	770,000
公認会計士報酬		1,200,000	1,200,000
雑費		200,000	200,000
経常費用計	74,833,983	8,974,000	83,807,983
当期経常増減額	-4,630,983	3,038,654	-1,592,329
当期一般正味財産増減額	-4,630,983	3,038,654	-1,592,329
一般正味財産期首残高	42,900,000	7,616,829	50,516,829
一般正味財産期末残高	38,269,017	10,655,483	48,924,500
II 指定正味財産増減の部			
受取寄付金・助成金	1,500,000	0	1,500,000
一般正味財産への振替額	-1,500,000	0	-1,500,000
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	1,237,682	20,000,000	21,237,682
指定正味財産期末残高	1,237,682	20,000,000	21,237,682
III 正味財産期末残高	39,506,699	30,655,483	70,162,182